

# 将来と課題

森ノ宮医療大学大学院 保健医療学研究科 山下 仁

日本は、中国、韓国、および西洋の国々から流入してきた異質な文化や技術を取り入れて、日本人にとってより適合性・親和性の高い独自の文化や技術を創り上げてきた。このことは鍼灸医学についても当てはまる。千年以上前に朝鮮半島を経由して伝来した古代中国の鍼灸医術をもとに日本の風土や日本人の体質に合わせて独自の鍼灸技法を考案し、さらには近代に至って導入された西洋医学をも巧みに同化して日本鍼灸のスタイルを構築してきた。このことは、本学会会員の半数近くが解剖生理学と経絡経穴学の両者を折衷して鍼灸臨床を行っているという調査結果（全日本鍼灸学会雑誌 2004; 54: 14-26）からも理解できる。しかし、鍼灸がグローバル化した今日、日本鍼灸の担い手自身が日本鍼灸の特質と課題に対する認識を強める必要がある。

臨床においては、多様性の中にある共通部分を明確化すべきであろう。そのためには、診断治療の技法だけでなく、鍼灸師マインドの根底に流れる身体観、哲学、職人魂、あるいは倫理観といった曖昧なものにも光を当て、何をもって日本鍼灸のアイデンティティと呼べるのかについて合意を探る努力が求められる。疾病の治療と予防に対する貢献は勿論のこと、生命の帰結が死であることを考えるならば、日本鍼灸は高齢化社会において健康の質だけでなく、死にゆく過程の質にどう関わるのかについても模索していかなければならない。鍼灸なしの医療は何が足りなくなるのか、あるいは鍼灸を導入した医療は何ができるのかについて、日常臨床経験から実感を伴うデータ抽出作業を行う必要がある。

研究においては、鍼灸刺激によって生起する無限に近い生体反応の一部を切り取って観察する手法だけでなく、より総合的な視野と評価尺度で人間の心身を捉える研究も推進すべきである。もちろんランダム化比較試験に代表されるような手法で、対照群との比較によって得られる良質のエビデンスを作る作業は重要である。鍼灸が治未病に貢献することを強調するなら、なおさら疫学的手法を用いた研究に注力しなければならない。しかし一方で、対照群のありかた、個体差の取り扱い、臨床試験環境の特殊性といった、現行の研究方法論を改革する議論も積極的に行っていくべきであろう。過去に鍼麻酔報道をきっかけとして痛みの研究が進歩したように、微弱刺激による生体反応やプラセボ論などについては、日本鍼灸の領域から発展してくる可能性が期待できるからである。これらの新しい知見や概念を英語で海外に発信していくことは研究者個人レベルだけでなく本学会としての課題でもある。

教育においては、一定の質を保証できる人材を養成するためにコア・カリキュラムを策定すべきであるが、知識や技術の習得だけでなく理念の継承も行うためには、やはり日本鍼灸のアイデンティティの明確化が課題となる。また、教育の質の保証のためには教員の質の保証が重要である。そのためには教員や臨床家に対する卒後教育・継続教育をより積極的に実施していかなければならない。さらに、プライマリケアだけでなく、リハビリテーションや緩和ケアなど幅広く利用価値があるということを国民全般および医療従事者にもっと理解してもらうために、日本鍼灸の基礎知識や臨床的エビデンスに容易にアクセスできるデータベースを充実させる作業も、教育の一環と捉えることができよう。

歴史上何度か存亡の危機を乗り越えてきた日本鍼灸は、将来においても同化と折衷の精神をもって、常に新しい医科学と文化を取り入れながら進化してゆくであろう。今後は、医療の中での位置付けだけでなく、日本文化の中での位置付けをも明確化していかなければならない。人々や地域に密着した日本鍼灸を目指して、いわゆる科学的な研究だけでなく、医療文化としての鍼灸の存在意義や在り方を思索することが重要になってくるのではないかと考えている。

## ■山下 仁（やました ひとし）

---



森ノ宮医療大学大学院保健医療学研究科・教授

略歴：1987 明治鍼灸大学鍼灸学部鍼灸学科卒，鍼灸師、1987～1992 愛媛県立中央病院

東洋医学研究所技師、1992～2006 筑波技術短期大学（現：筑波技術大学）助手、1999～

2002 英国エクセター大学補完医学研究室客員研究員、2002 博士(保健学)（東京大学）、2007年～森ノ宮医療大学保健医療学部鍼灸学科学科長・教授、2011年～森ノ宮医療大学大学院保健医療学研究科研究科長・教授

主な学会活動：全日本鍼灸学会常務理事、日本統合医療学会評議員、International Society of Complementary Medicine Research (ISCMR) 発起人、Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine (eCAM) 編集委員、The Journal of Kampo, Acupuncture and Integrative Medicine (KAIM) 編集委員

主な研究業績：「鍼治療の科学的根拠」(共訳，医道の日本社，2001)、「Popularity of complementary and alternative medicine in Japan: a telephone survey」(Complementary Therapies in Medicine, 10(2): 84-93, 2002)、「Safety of acupuncture practice in Japan: patient reactions, therapist negligence and error reduction strategies」(Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine, 5(4): 391-398, 2008) ほか